民主香川
定価　月100円
発行所
民主香川社
高松市藤塚町
3丁目13－14
☎(087)834-7311

戦後・被爆80年
会場満席！　被爆体験から平和を考えるつどい

高松市で先月27日、日本被団協のノーベル平和賞を受賞した戦後・被爆80年の節目に、平和運動の若い世代への継承を目的として、被爆体験から平和を考えるつどいを同実行委員会が県原爆被害者の会の協賛で開き、会場が満席となる250人超が参加しました。

医療や保育職場、民青などの民主団体で構成する実行委員会は、香川大学、四国学院大学などで、学長や教授との懇談をし、講義の時間を割いてもらい大学生に企画を案内しました。いままで繋がりのなかった大学生など幅広く新しい参加がありました。

講演で、香川県木田郡三木町在住の96歳の長尾昭雄さんは、当時の原爆の強力な熱線や放射能、爆風の被害にふれ、「広島市内は一瞬で廃墟。火災で全部燃えた」と振り返りました。呉海軍工廠の工員養成所で製図工として学び働き、16歳の時、県立広島工業学校で被爆。「8時15分、私は校舎の窓際で外の空気中に青白い光がいっぱいに見え大変だと思った瞬間、『ピカッ』と光り『ドン』という音とともに校舎は爆風で上から押しつぶされた。70人中、生き残ったのは4～5人で残りは即死した」と、自身は瀕死の重傷を負い、その後の原爆症となった体験を語りました。

世界の戦争状況や、日本政府のイージス艦購入などの軍備の拡大を指摘。「地元の小学生の集団登校を毎日見て、彼らが大人になるためは、平和でなければならない」と、次世代に平和を引き継ぎたいという被爆体験を語るきっかけとなる思いや願いをのべ、「軍備拡大でなく、いまこそ平和の運動が必要で、平和な日本をつくるため皆さんに語り継いで欲しい」と訴えました。

四国学院大学の平和学メジャーの大学生からの発言、県民医連労組の平和行進への参加、9条の碑建立の財政活動や、医療職場の広島こども平和ツアーなど各団体から活動紹介と交流があり、会の最後に「青い空は」を合唱しました。

参加者から「平和のための地道な活動やたくさんの努力があるとわかった」「生の被爆体験が聞けてよかった。平和について考えを深め次世代や世界に拡げることが大事」などの感想が寄せられました。

太鼓台

10年前に退職記念として、イギリスを旅行した。古い建物を維持し、街並みも緑豊かな田園地帯も絵葉書のような景色が続いた。自販機も色鮮やかな看板もない。

最初の訪問地で現地ガイドさんがスコットランドはイングランドと異なり、社会保障が充実し、弱者によりそう国だと誇らしく語った。大学までの学費は奨学金や補助金制度が充実して無償、シングルマザーなど困窮している人には、住居を確保し、安心して生活できる国だと。後で調べると高齢者は医療費だけでなく、薬も無料だと分かった。

格差社会の国イングランドでも、ピーターラビットのぬいぐるみは通常の税率は20％だったが、地元の店で買ったビスケットや紅茶は消費税がかからない。イギリスでは、嗜好品でない食料品や上下水道代、運賃、子どもの衣服や靴、女性の生理用品や新聞や本には課税していない。生活困窮者への配慮が感じられる。

物価高で給料の上がらない国日本。国民の生活を守るためにも、経済の活性化のためにも消費税を今すぐ、せめて5％に下げてほしい。（こ）

平和委員会四国ブロック
学習交流会を開く

香川県平和委員会は先月26日、高松市で平和委員会四国ブロックの学習交流会を開きました。

日本平和委員会の西村美幸事務局次長は「戦後80年を迎え、戦争や準備をさせないための『わが町を戦争の拠点にしない・平和の拠点にしよう』の運動を進めるため武器輸出の拡大の中止、自衛隊への対象者名簿の提供を止める2つの署名運動と、地域ごとの弾薬庫や民間施設の軍事利用などの反対運動の報告や交流が目的だ」とあいさつしました。

埼玉県平和委員会の二橋元長代表理事がオンラインで講師を務め、自衛官募集業務に関する自治体アンケートと訪問の「ピースキャラバン」の取り組みや自衛隊の広報活動などの実態を報告。市民が自治体と国との対等平等の関係を求め、自治体を平和の側に立たせ、再び赤紙を配らせないことや、市民が自衛隊をチェック（確認）し、ウォッチング（見る）活動を日常化し、情報共有する意義を強調しました。

香川からは、県平和委員会代表理事の日本共産党樫昭二県議がブルーインパルスへの抗議運動、高松港の「特定利用港湾」指定への反対運動を報告するなど、四国4県の取り組みが各代表者から出されました。

讃岐の文学碑めぐり ㉘
小豆島が生んだ流行作家
壺井栄（一八九九～一九六七）

文・写真　深沢　雨根

壺井栄は小豆島の坂手村に生まれた。母は十人の子と孤児二人を引き取り、十二人の子を育てた。この子供たちが「二十四の瞳」の原型になった。

岩井栄が詩人の壺井繁治（しげじ）と結婚したのは、一九二五年である。二人は同郷で、手紙のやり取りもしていた。「一度遊びに来ませんか」と繁治が手紙を出したところ、栄は勤めていた坂手村役場を退職して上京した。

結婚してからは食うや食わずの生活が続いたが、中野重治、佐多稲子、宮本百合子らの作家と知り合い、小説執筆の指導を受けるようになる。一九二八年繁治が治安維持法違反で逮捕される。これ以後、しばしば家宅捜査を受け、繁治は計六回逮捕された。

一九三三年二月、小林多喜二が特高警察に虐殺されたとき、小林宅に駆けつけ、運ばれてきた遺体を清めた。一九三四年から三九年にかけては宮本百合子の秘書兼家政婦のようなかたちで家事、買物のお伴、口述筆記などをした。百合子が検挙され入獄した時は、面会や差入れに尽力している。栄のデビュー作「大根の葉」（一九三八）は、百合子の紹介で改造社の『文芸』に掲載された。

第四回新潮文芸賞（一九四一）
第一回児童文学賞（一九五一）
第七回女流文学賞（一九五五）
などを受賞し、流行作家になった。一九五六年、土庄港に『二十四の瞳』の主人公・大石先生と十二人の子どもたちのブロンズ像「平和の群像」が建立された。栄は、「建ててくださったふるさとの人たちのご好意には感謝していますが、題字を書かれた鳩山一郎さんは、再軍備をめざす人ですよ」と、除幕式には出席しないと言って関係者をあわてさせた。鳩山一郎は総理大臣であった。栄は題字は南原繁にと望んでいた。

一九七〇年、壺井栄文学碑がふるさと坂手の丘に建立された。栄は少女の頃、この丘でよく遊んだ。文学碑建立の発起人には、南原繁、円地文子、丹羽文雄、蔵原惟人ら著名人が名を連ねた。除幕式であいさつした木下恵介は、これまで撮影した映画の最高作品が「二十四の瞳」だったと述べた。石碑には、栄が好んで色紙に書いた言葉が刻まれている。

桃栗三年
柿八年
柚子の大馬鹿
十八年

一九九二年、内海町田浦の「二十四の瞳映画村」の中に「壺井栄文学館」が開館した。

壺井栄の文学碑